18. 腰椎椎間板ヘルニアにおける術前画像診断—ミエログラフィー・CTM と MRI の比較について—

李 康傑，北原 宏，高橋和久
山縣正庸，村上正純，高橋 弦
豊根知明，守屋秀繁 (千大)

目的と対象：手術にて確定診断を得た32例を対象とし腰椎椎間板ヘルニアにおける MRI の画像診断能をミエロ・CTM と比較検討した。方法：ヘルニア高位診断にあたって，臨床所見，ミエロ・CTM 像，MRI 像をそれぞれの診断基準にもとづき検討した。結果：①ミエロ・CTM にて得られた画像診断と確定診断との一致率(93.8%) は MRI (81.3%) よりも高かった。②MRI 画像にて多椎間ヘルニアと診断される症例では，現段階にて MRI のみにては責任高位の診断が不可能であった。③本研究に用いた MRI 画像診断基準において，1椎間ヘルニアと診断される症例にはミエロ・CTM の検査が省略可能と思われた。

19. 頸椎カリエスの1症例

高相晶士，竹内 孝，村山憲太
湯山琢夫 (国立習志野)

脊椎カリエスは減少の傾向にあるが，重要な脊椎感染症であることに変わりがないが，今回その中でも，稀な頸椎カリエスにて，四肢マヒを呈した精神障害者の1例を経験したので報告した。症例は64歳，女性で，バイオプシーにより結核菌を証明し，C_4～C_7病巣郭清＋骨移植による手術を行い，術後上下肢とも MMT 4まで回復したが，転院後，リハビリの整備的，人的な問題もあり，ほとんどねたきりとなり適切なリハビリの継続の重要性を痛感した。

20. 術中脊髄誘発電位が著明な振幅増大を示した胸腰椎黄色靱帯骨化症の1例

中村伸一郎，岡本 弦 (国立静岡)
村上 正純，望月真人，鳥飼英久
(千大)

症例は65歳，男性。D9/10～D12/L_1に OYL を認めた。SpEP による脊髄モニタリングのもと D9～L^1の広範囲椎弓切除術施行。control 波形は低振幅の多相性成分のみからなるものであったが，除圧とともに，最大 control の950%の振幅増大を記録。術後神経症状の著明な改善を認めた。本例では術中，術後の神経症状の改善が予測でき，きわめて有意義であった。

21. 脊椎外傷における Spinal Internal Fixator の有用性について

中川晃一，礒辺啓二郎，山岡昭義
重田博夫，須関 馨，斎藤 隆
(船橋中央)
宜保晴彦 (宜保整形外科)
渡部恒夫 (蘇我病院)

今回われわれは，AO spinal internal fixator を胸腰椎，腰椎損傷に対して使用し，その有用性について検討した。対象は破裂骨折3例，脱臼骨折2例の計5例であり，手術は必要かつ十分な後方除圧，AO spinal internal fixator による解剖学的な整復，固定後，後側方固定を実施した。術後2か月から19か月，平均10.6か月の経過観察を行ったが，すべての症例で臨床症状，神経症状は改善し，X線計測上でも良好な整復位とその保持が得られた。特に脱臼骨折および受傷後1週間以内に手術を施行した破裂骨折では，その整復に際し操作性に優れていた。また short fusion にて優れた固定性が得られることが特長であるが，破裂骨折に対してさらに pedicle bone grafting を併用すれば，fusion を必要とせず，2 motor segment の温存も可能であると考えられた。

22. 腰椎変性疾患に対する Pedicle Screw Fixation の試み

須関 馨，礒辺啓二郎，山岡昭義
重田博夫，中川 晃一，斎藤 隆
(船橋中央)
宜保晴彦 (宜保整形外科)
渡部恒夫 (蘇我病院)

腰椎変性疾患に対し，pedicle screw fixation を用いた14例を詳細に分析し，腰椎変性疾患の診断と治療における pedicle screw fixation の位置ずけを行ったので報告した。術後経過は全例良好であり，JOA score で平均術前11.7点が術後24.8点であった。腰椎変性疾患の腰痛，下肢痛の原因は root, cauda equina, disc, hernia, facet joint, medial branch of dorsal ramus of lumbar nerve など多岐にわたっており，それぞれに対応した処置が不可欠で，不安定性の質 (angular, translational, rotational)・量，日常の活動性に対応した固定性を持つ fusion, instrumentation が必要である。この点において，rigid, semi-rigid など多様な固定性を持つ pedicle screw fixation は極めて有用と思われた。